

中国語形容詞の動態性に関する考察

—「很+V/A+了」の構造における動詞との使い分け—

高 立偉

要 旨

本稿においては、前に程度副詞、後ろに動態助詞が付く形容詞の構造および動詞との使い分けについて研究を行う。

形容詞は普通性質・状態などを表し、静態的な感覚を与えるが、後ろに動態助詞（了、着、過）が付くことによって、テンス・アスペクトの語法範疇で動態的として考えられるようになる。さらに、後ろに「了」が付く形容詞について、この場合の形容詞は動詞化したと思われるが、動詞化とは言っても、機能から考えると、やはり動詞化とは言いがたいのではないか。形容詞の特徴を保ちながら、「很」、「了」などと共起しているのではないかと考えられる。形容詞と動詞のあり方を明らかにするために、「很+V/A+了」形式を中心として考察する。

「很」が形容詞と共起しやすいのは、「很」が状態の程度を修飾し、程度因子の変化（量）を表せるからである。その例外として、「很」と共起しない程度形容詞（DA）があるが、これは程度形容詞が程度因子を固定するからである。また、「很」が動詞と共起しにくいのは、動詞が表す変化はアスペクト的な局面であって、程度因子の変化ではないからである。

キーワード：形容詞、動態性、機能、程度因子、変化

1 副詞と共起する形容詞

形容詞と動詞との区別についての先行研究は極めて少ないが、あってもかなり議論の余地のあるものであると思われる。一つの例として挙げられるのは、朱徳熙（1982）の『語法講義』であろう。形容詞と動詞との区別について、朱は以下のように述べている。

判断形容词与动词的区别 (1) 前边能不能加「很」。(2) 后边能不能带宾语。

形容词と動詞との区別はこう判断する。(1)前に「很」がつけられるかどうか。(2)後に目的語をとることができるかどうか。

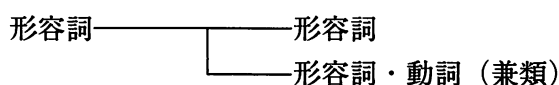
形容词と動詞との区別を判断するとき、以上の2つの条件を満たさなければならない。しかし、以下の例を見てみると、

- a 信中的意思、很明白。(手紙の内容はとてもはっきりしている。)(杜拉拉升职记)
- b 杜拉拉还是很明白自己的身分的。(杜拉拉は自分の身分が分かるのだ。)(杜拉拉升职记)

例 a と例 b では、同じ「明白」であるが、前に「很」を付けることもできるし、後に目的語をとることもできる。この「明白」は朱の基準では形容詞なのか、動詞なのかについての判断ができなくなる。これに対して、朱は「この判断の基準は性質形容詞にのみ適用できる」と述べているが、そもそも朱は形容詞を性質形容詞と状態形容詞のように分けていても、「単音節および簡單式の形容詞」を性質形容詞、「複雑式の形容詞」を状態形容詞と定義しているのだから、この分類そのものに検討する余地がある。朱の分類基準はまだ不十分ではあるが、「程度副詞+品詞」の視点からの考察はかなり価値がある。本稿では、朱の分類基準を参考にしつつ、さらに程度副詞にアスペクトを表す「了」を加え、形容詞と動詞の区別を明らかにする。

ところで、「明白」のような前に「很」が付き、後に目的語をとれる品詞は形容詞と動詞のどちらの範疇に入るのだろうか。劉月華他(1987:178)は形容詞・動詞の兼類として考察を行った。これについて、劉他は「ある形容詞が目的語をとる(使役の意味を表すことが多い)ことができたり、動詞と同じ重ね型(A・A型やABA B型で<試行>や動作の時間の短いことを表す)を作ることができるのであれば、それは動詞にも属しているのである。」と述べている。従って、劉他の分類によれば、その関係は以下の図のようになる。

図1 形容詞・動詞の関係図 a



つまり、図1のように、形容詞の一部は形容詞そのままであるが、一部は動詞になる(いわゆる動詞との兼類)ということになる。しかし、筆者は以下のように理解し

てもよいと考える。

図2 形容詞・動詞の関係図 b

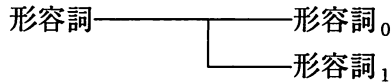


図2で示したように、形容詞のうち形容詞そのままであって、おおよそ「性質・状態」を表す形容詞を「形容詞₀」と呼び、「性質・状態の程度」を表す形容詞を「形容詞₁」と呼ぶことにする^{注1}。さらに、形容詞と動詞を区別するために、以下のように、「很」だけではなく、すべての副詞を使用し、考察することにする。

『現代中国語総説』によれば、副詞は主に以下のように、六つの種類に分けられる。

- 1) 程度を表す副詞 很、挺、太、顶 など
- 2) 範囲を表す副詞 都、也、只、仅 など
- 3) 時間を表す副詞 正在、刚、才、忽然 など
- 4) 重複を表す副詞 又、再、还、重新 など
- 5) 否定を表す副詞 不、没有、别 など
- 6) ムードを表す副詞 却、可、倒、竟、大约、大概 など

以上の六種類の副詞が、形容詞と動詞の前に付けられるかどうか、また後に「了」が付けられるかどうかにつき検証する。すると表1のような結果になる。

表1 副詞と共起する形容詞と動詞

	程度	了	範囲	了	時間	了	重複	了	否定	了	ムード	了
形容詞	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
動詞	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

時間副詞、重複副詞、否定副詞、ムード副詞は形容詞、動詞の前に付けることができ、また同時に形容詞・動詞の後に「了」も付けられることが分かった。次に残りの程度副詞と範囲副詞を中心に論じたいと思う。

¹ この分類は語義上における「性質形容詞・状態形容詞」の分類とは異なるものである。

2 「程度副詞 / 範圍副詞 + V / A + 了」から見る形容詞と動詞

2-1 「程度副詞 + V / A + 了」の使用状況

現代中国語では、書き言葉・話し言葉のいずれにおいても、「程度副詞 + 形容詞 + 了」の使用頻度はかなり高い。程度を表す副詞は、おもに「很、挺、太、頂、更、最、越、十分、非常、稍微、略微」などがあるが、そのすべては一部の形容詞を修飾することができる。そして、程度の変化を表すために、後に「了」を付ける。この一部の形容詞は「形容詞₀」に当たる。同様に、程度副詞は一部の動詞も修飾する。例えば「很喜欢、非常后悔、稍微忍耐」などがある。『現代汉语动词分类词典』（以下分類詞典と略する）によれば、「喜欢、后悔、忍耐」は「心理類動詞」に属す。とはいえすべての心理類動詞が程度副詞によって修飾されるわけではなく、「很喜欢」とは言えるが、「很辨认、很遗忘、很回忆」などは自然な中国語ではない。分類詞典によれば、程度副詞で修飾できる心理類動詞は、「感情活動」と「意願活動」のみである。「感情活動」を表す動詞は「喜欢、喜欢、鄙视、轻视、仇恨、怨恨、后悔、悔恨、害怕、恐惧、哭泣、抽泣、怜惜、同情、忍耐、羡慕、相信、信任、尊重、敬重」などであり、「意願活動」を表す動詞は「应该、敢于、能够、愿意、情愿」などである。これ以外の動詞は、程度副詞の修飾を受けられないであろう。これをまとめると表2のようになる。

表2 程度副詞と共起する形容詞と動詞

		程度副詞	了
形容詞	形容詞 ₀	○	○
	形容詞 ₁	×	×
動詞	感情活動・意願活動動詞	○	○
	その他の動詞	×	×

表2のように、性質、状態を表す形容詞₀は程度副詞の修飾を受けられ、後にも「了」が付けられる。「雪白、软绵绵」のような形容詞（形容詞₁とみられる）は、程度副詞の修飾を受けられない。後に「了」が付かないが、その理由としては、その形容詞自身が程度を表しているからである。程度副詞の修飾を受けると、不自然な中国語になる。これに対して、感情活動、意願活動動詞以外の動詞は、そのすべてが程度副詞の修飾を受けられず、また後に「了」が付けられない。しかし、感情活動、意願活動を表す動詞は、感情形容詞、感覚形容詞に近いので、形容詞₀と同様な傾向があるものと思われる。

一方、範圍副詞はおもに「都、也、总、共、一共、统统、只、就、光、仅、仅仅」などがあるが、そのすべては動詞を修飾することができる。形容詞₁を修飾できない

範囲副詞は少ない。まとめると表3のようになる。

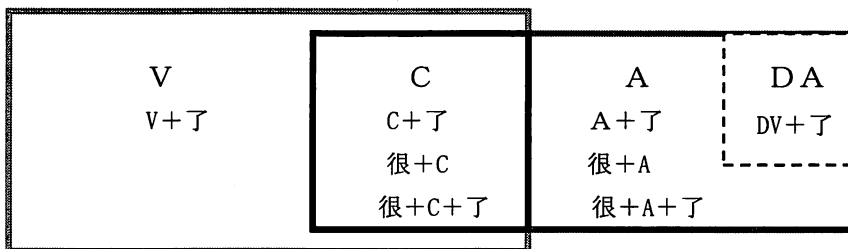
表3 「範囲副詞+形容詞+了」の使い分け

	都	也	总	共	一共	统统	只	就	光	仅	仅仅
形容詞	○	○	×	×	△	△	△	△	△	△	△
了	○	○	×	×	△	△	△	△	△	△	△

2-2 「很+V/A+了」からみる形容詞と動詞の関係

前節では、程度副詞「很」と共起する形容詞と動詞について少し触れたが、ここでは、「很」+V/A+了の構造から形容詞と動詞の区別および関係を明らかにする。図3は両者の関係を表すものである。

図3 形容詞と動詞関係図



V = verb (動詞)

A = adjective (形容詞)

C = compatibility (兼類)

DA = degree adjective (程度形容詞)

図3では、動詞(V)と形容詞(A)の関係を示している。VとAの重なっている部分は、先行研究で兼類と呼ぶものであり、ここでは「C (compatibility)」と記号化する。形容詞の中で、程度を表す形容詞を「DA (degree adjective)」と記載することにした。ここで興味深いのは、兼類「C」と程度を表す形容詞「DA」の使い方である。

まず、後に「了」を付けることができるが、前に「很」を付けることができない動詞は一般的な動詞であるが、ごく一部の動詞は前に「很」を付けることができる。このような動詞は「很+V」のような使い方があるものと、また「很+V+了」の使い方があるものがある。例えば、「很希望(とても希望する)」、「很讨厌了(とても嫌った)」などである。これに対して、形容詞の多くは前に「很」を付けることができ、

あるいは前に「很」、且つ後に「了」を付けることができる。つまり、一部の動詞は形容詞と同じような使い方があることになる。劉月華他はこのような品詞を兼類と呼んだ。では、そもそもどのような品詞が兼類に属しているのだろうか。これについて考察することにする。

2-3 動詞と形容詞の兼類「C」

動詞の後に「了」が付けられるかどうかについては、動詞の分類を参照して考察することになる。孫偉（2007：17）では、動詞の語法機能に、「持続性と非持続性」を加えて、動詞を以下のように分類している。

- (1) 動作動詞：持続性動作動詞と非持続性動作動詞を含む。一般的に動態助詞「了、着、过」を帯びることが可能である。
 - a) 持続性動作動詞：持続的で繰り返すことができる動作を表す動詞。「吃（食べる）、坐（座る）、表演（演じる）、收集（収集する）」などがある。
 - b) 非持続性動作動詞：持続することができない、瞬時に発生して完了する動作を表す動詞。非持続性動作動詞の後に「着」を使用することができない。「死（死ぬ）、懂（分かる）、结婚（結婚する）、破裂（破裂する）」などがある。
- (2) 状態動詞：人間あるいは動物の精神、心理、生理などの状態を表す動詞。「爱（愛する、好む）、讨厌（嫌う）、希望（望む）、渴（渴く）、困（眠くなる）」などがある。
- (3) 関係動詞：主語と目的語の間に存在する関係を表す動詞。動詞の後には、一般的に動態助詞「了、着」を用いることが少ない。「姓（姓は～である）、是（～である）、似（～に似ている）、成为（～になる）、有（いる、ある）」などがある。
- (4) 能願動詞：願望や物事に対する主観的判断を表す動詞と、出来事発生の可能性についての判断を表す動詞。この2種類の動詞は、さらに以下のように分けることができる。
 - a) 意思・願望を表すもの：要（求める、願う）、想（～したいと思う）、愿意（～したいと思う、希望する）、肯（承知する）、敢（～する勇気がある）などがある。
 - b) 物事に対する判断を表すもの：应（～べきである、～しなければならない）、应当（同「应」）、该（～すべきである、～する必要がある）、应该（同「该」）、得（dei）（きっと～になる）、しなければならない）がある。
 - c) 主観および客観条件に対する判断を表すもの：能（できる、可能である、許される）、能够（同「能」）、可以（できる、～（ら）れる）がある。
 - d) 許可を表すもの：能（～してもよい）、可（許される、～してもよい）、可以

(同「可」、准许(許可する、同意する)、得(de)(他の動詞の前に用いて、許可を表す)がある。

e) 評価を表すもの: 配(～値する)、值得(～するかいがある)がある。

f) 可能を表すもの: 可能(可能である、ありうる)、会(できる)、要(もし～ならば)、得(dei)(きっと～になる)、能(できる)がある。

以上の孫の分類は、テンス以外に、アスペクトを表す「了、着、过」も含めて中国語の時間表現を加味してなされたものである。本稿の研究対象とする「了」の示す動態性に関する研究は孫の分類を基礎とし、異なる視点から分析を行うものである。

孫論文の分類を参考にしてさらに図3の内容を詳しくすることができる。図3の「V」の枠に入るのは、(1) 動作動詞; (3) 関係動詞; (4) 能願動詞のd) 許可を表す動詞; f) 可能を表す動詞である。「C」の枠に入るのは、(2) 状態動詞; (4) 能願動詞のa) 意思・願望を表す動詞; b) 物事に対する判断を表す動詞; c) 主観および客観条件に対する判断を表す動詞; e) 評価を表す動詞である。ここでは、(4)の能願動詞だけは「很」が付くものと付かないものの二種類に分ける。その使い方について、楊雲(1999: 69)も以下のような例を挙げている。

A: 爱、恨、想、怕、害怕、担心、希望、感激、向往、喜欢、关心、惦记、想念、挂念、了解、后悔、留恋、警惕、感谢、羡慕、敬仰、尊敬、崇拜、钦佩、爱惜、珍惜、怜悯、同情、信任、相信、在意、怀疑、讨厌、嫉妒、放心など

B: 觉得、感到、认为、认识、知道、估计、打算、企图、主张、体会、信仰、图谋、计划、设想、考虑、牵挂、憧憬、忘记、记住、记得、回忆、猜测、思考、思索、捉摸、操心、忖度、醒悟、反省、当心、留神、忍耐、责怪、原谅、同意など

Aグループはすべて前に「很」を付けることができ、後に「了」を付けることができる。Bグループは前に「很」を付けることができない。その理由としては、楊雲は「前者实际上是状态动词、后者实际上是行为动词; 前者具有程度意义上的内部层级性、后者没有。(前者[Aグループ(筆者注)]は実際に状態動詞であり、後者[Bグループ(筆者注)]は実際に行為動詞である。前者は程度意義上における内部の層級性を持ち、後者は持たない)」と述べている。Aグループ動詞は心理的な活動を表す。この種類の動詞は客観事物および客観環境に対して、消極的な反応をとり、あまり主動的な意識がないため、動作性は弱い。このような動詞は記述より、描写に近いので、心理状態動詞と理解することができる。これに対して、Bグループ動詞は主観的な意識があり、動作性が強いので、心理行為動詞と理解することができる。

3 程度因子の変化

第2章では、「很+V/A+了」における動詞と形容詞の区別と関係を考察した。しかし、「很+V/A+了」はどのような程度構造をもつか、どのような動態性を持つかはまだ分からない。本章では、これについて、さらに考察を行う。

楊雲（1999：69）によれば、心理状態動詞は「内部の層級性を持つ」。「層級性」というのは、程度の変化のあることである。例えば、「喜欢、尊敬、怀疑」は0%～100%の変化を表すことができるため、前に程度副詞「很」が付くのも自然であろう。心理行為動詞（例：思考、計画など）はただすでに存在している行為を表すため、一般動詞と同じように、程度性を持たないので、程度副詞「很」が付くと、不自然になるのである。

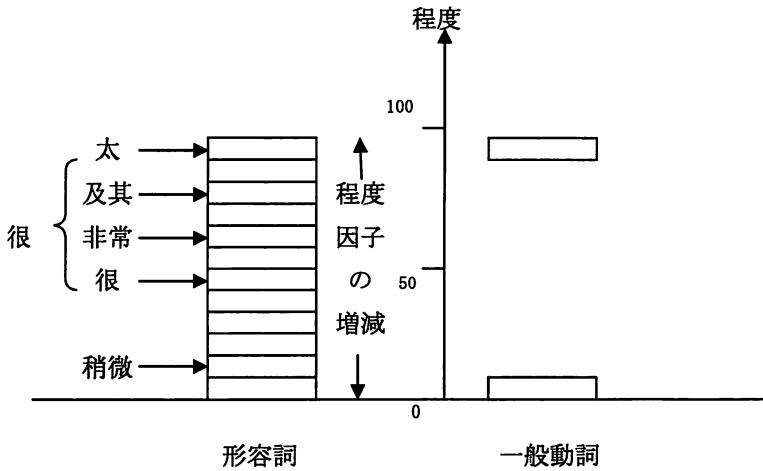
心理状態動詞（形容詞にも属している）と一般形容詞が「很」と共起できるのは、それ自身の程度変化があるからである。例えば、「很喜欢（学习）了」「（勉強が）かなり好きになった」「（西瓜）很熟了」「（スイカが）かなり熟している」は程度の変化を示すものとして存在している。

「喜欢学习」は「不喜欢（好きではない）→稍微喜欢（少し好きになる）→很喜欢（かなり好きになる）→非常喜欢（とても好きになる）→及其喜欢（非常に好きになる）→太喜欢（極めて好きになる）」のような変化過程を持っている。

「西瓜熟」も「不熟（熟していない）→稍微熟（少し熟した）→很熟（かなり熟している）→非常熟（とても熟している）→及其熟（非常に熟している）→太熟（極めて熟している）」のような変化過程を持っている。以上のような変化過程には0%から100%までそれぞれの段階があるものと考えられる。各段階で表される程度を各段階での「程度因子」と呼ぶことにする。この程度因子を考えることにより、状態の変化が「量」的に表現できるようになる。

さらに、これを図示すると、図4のようになる。

図4 程度因子の変化



この座標図のy軸は程度因子の変化を表す。「很」は形容詞と共起する場合、例の「很熟（かなり熟している）」は「熟」の程度を表す。「熟」の程度因子は0から100まで数量の変化があり、細かく規定すれば図4のようになる。しかし日常の使い方では、「很」はかなりの幅があり、そのことを考慮して、「熟」の程度因子が50を越えれば、「很」で修飾できるようにすると、「很熟（かなり熟している）」は50～100のいくつかの段階に対応させることができる。これに対して、一般動作動詞は行為を表すため、0か100の二つしか表さない。「する」か「しない」かである。程度因子も0か100の二つの表現しかない。この場合、「很」とは共起しにくく、修飾できないと言えよう。この座標図は程度因子によりいわゆる「量」の変化を表すためのものであるため、形容詞における量の変化を表すことができるが、動詞では表すことができない。その理由としては、変化の種類が違うからである。もちろん、動詞自体の変化もあるが、それは動作の「開始、進行中、終了」のアスペクト（局面的）変化であり、ここの変化とは別の種類のものである。

さらに、この座標図で表せる形容詞の程度因子について以下のようにいうことができる。

程度因子の考えられるものは、一つの物差しで（ある基準で）測れる様態の変化であって、それは温度、色（波長）、文化度、能力、長さ、重量、知識量、理解力、美醜度、硬さ、速度などである。

4 程度形容詞（DA）と「很」と「了」

図3に示したように、一般形容詞は前に「很」、あるいは前に「很」かつ後ろに「了」

が付けられるが、程度を表す形容詞に限って、前に「很」が付けられない。例えば、「強」は前に「很」が付けられ、「很强」となり、また後ろに「了」が付けられ、「很强了」になり、いずれも自然である。「強」と同じように、「很强大了」、「很强健了」、「很强壮了」もおかしくない。しかし、「紅」は「很」で修飾でき、「了」も付けられ、「很紅」、「很紅了」いずれも言えるが、「很粉紅」「很橘紅」「很血紅」「很通紅」などはおかしい。この違いは何であろうか。

語法機能による形容詞の分類は「A（紅、高）」、「AB（強健、粉紅）」、「ABB（紅彤彤）」、「ABAB（高兴高兴）」、「AABB（整整齐齐）」のようになっている。興味深いのは、前に「很」、あるいは前に「很」かつ後ろに「了」が付けられるのは、「A（紅、高）」、「AB（強健）」である。付けられないのは、「AB（粉紅）」、「ABB（紅彤彤）」、「ABAB（高兴高兴）」、「AABB（整整齐齐）」である。「AB」は付けられるものと付けられないものの二種類に分けられる。これについて、以下のように考えることができる。

まず、「AB」の意味は「 $A \equiv B$ 」の場合、形容詞は程度性をもち、程度因子で変化を表せるため、「很」と「了」とが共起しやすい。このような形容詞を「 AB_1 」と呼ぶことにする。

次に、「AB」の意味が「 $A \neq B$ 」の場合、程度因子の変化はなく、一つの段階に固定される。例えば、「粉紅」では、「粉」はすでに「紅」の程度を表すため、程度因子は一つの段階に固定される。このため、程度を表す「很」を加えると、意味が重複ないし排斥しあう。「大量、漆黑、全胜」などもそうである。このような形容詞を「 AB_2 」と呼ぶことにする。「ABB」、「ABAB」、「AABB」は「 AB_2 」と同じように、程度因子は一つの段階しか表せないため、「很」「了」との共起はしにくい。「 AB_2 」、「ABB」、「ABAB」、「AABB」を一般形容詞と区別するために、「程度形容詞(DA)」と名前をつけ、特定しやすくした。これは図3の中に「DA」として示されている。「DA」は「了」とだけ共起することができ、程度ではなく、変化を表す。前に「变得」を付け、「变得粉紅了」「变得整整齐齐了」のように扱うのが一般的である。

5 結論

中国語の形容詞における時間表現と動態性を記述するときに、「動詞化する、動詞的な扱い」というような説明が多いのであるが、動詞化とは言っても、機能から考えれば、やはり動詞化ではなく、形容詞自身の特徴を持ちながら、「很」、「了」などの品詞と共起しているだけなのではないか。形容詞と動詞との使い分けを明らかにするために、「很+V/A+了」を中心として考察した。

「很」と「了」が形容詞と共起しやすいのは、状態の程度を修飾し、程度因子の変

化（量）を表せるからである。その例外として、程度因子の変化で表せない程度形容詞（DA）がある。動詞と共起しにくいのは、動詞はアスペクト的な局面の変化を表すが、程度因子の変化を表さないからである。これが本稿での結論である。

なお、北京語には「很吃了一顿（おもいきって食べた）」、「很坐了一下（断然座り込んだ）」のような表現があるが、これは「很」が「狠」の誤用であり、動詞自体を修飾しているのではなく、文全体を修飾しているのではないかと考えられる。これについては今後の課題にしたい。

参考文献

- | | | | |
|--------|------|--|-----------------|
| 松岡 栄志他 | 2004 | 『現代中国語総説』 | 三省堂 |
| 郭 大方 | 1994 | 『現代汉语分类词典』 | 吉林教育出版社 |
| 金 立鑫 | 2002 | 「词尾了的时体意义及其句法条件」
『世界汉语教学』2002年第1期 | 世界汉语教育学会 |
| 李 迅 | 2004 | 「形容词+动态助词了结构的多角度研究」
『阿坝师范高等专科学校学报』第21卷第3期 | 阿坝师范高等专科学校 |
| 李 可 | 2007 | 『杜拉拉升职记』 | 陕西师范大学出版社 |
| 劉 月華他 | 1988 | 『現代中国語文法総覧』 | くろしお出版 |
| 刘 楚群 | 2002 | 『形容词的动态性及其语法形式』 | 广西师范大学硕士论文 |
| 時 衛国 | 2009 | 『中国語と日本語における程度副詞の対照研究』 | 風間書房 |
| 孫 偉 | 2007 | 『現代中国語の時間表現』 | 杏林大学国際協力研究科博士論文 |
| 杨 云 | 1999 | 「不受程度副词很修饰的心理动词」
『云南教育学院学报』第十五卷第1期 | 云南教育学院 |
| 张 国宪 | 2006 | 『现代汉语形容词功能与认知研究』 | 商務印書館 |
| 张 国宪 | 2007 | 「状态形容词的界定和语法特征描述」
『语言科学』第6卷第1期 | 徐州师范大学语言研究所 |
| 朱 德熙 | 1982 | 『語法講義』 | 商務印書館 |